

## 終焉の希望

竹中正夫

新島襄が終焉の地、大磯にたどりついたのは、一八九九（明治三二）年もおし迫った二月二十七日のことであった。もともと、

彼は、病弱な身であつた上に、大学設立募金のため東奔西走をなし、健康をかなり害ねていた。雪深い北陸、東北の地に苦闘する若き伝道者たちの労苦をおもひ、はたまた、相国寺門前に残した同志社の将来を憂い、内憂外患のなかに、彼は大磯の百足屋ひかでの離れ座敷に疲れた体を休めた。

旅さきの一人寝は、ただでさえ、夜のうつろを覚えさせる。よせてはかへす大磯の波の音をききながら、彼は、どんなおもいをもつて除夜をすごし、新年を迎えたのであろうか。おそらくあれをおもひ、これを

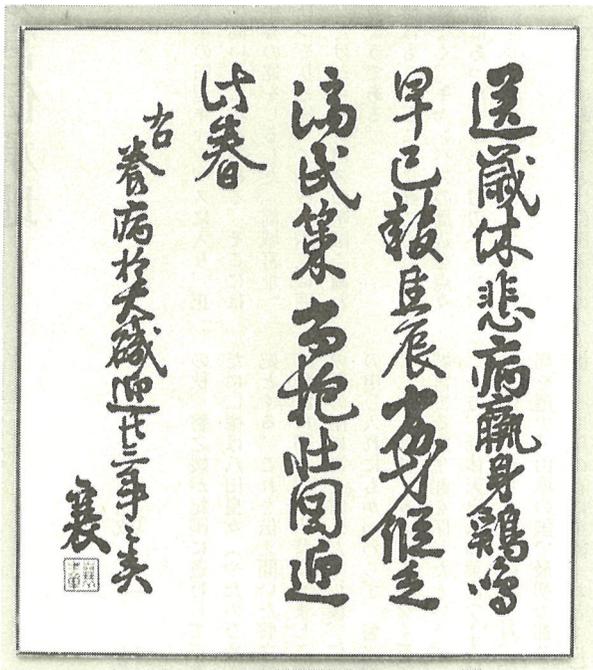
おもひ、新島は、あまりゆつくり眠ることなく暁をむかえたにちがいない。

このような中で作られたのが、「送歳」の漢詩である。「鶉が鳴いて早やすでに新年のあさをつけている」というあたりをみると、まんじりともせず、夜をすごして新年のあさを迎えた様子をうかがい知ることが出来るよう。

概して、人間が希望を抱くときには、三つのタイプがある。一つは、自分の内在的能力やちからをたよりとするもの、第二は、他人のちからに依存するもの、そして第三には、人間をこえた空極的の生命の働きに希望の根拠をおくものである。新島は聖書に根ざして真理の働きは、必ず自由をもたら

すことを確信していた。そこに彼の終焉の希望があつた。それは、終末（究極）的信仰に基く希望といつてもよい。新島の心中には寂寥感がただよっていたにちがいない。長年夢みてきたキリスト主義の大学の建設するという事業もまだその端緒にいたばかりであり、その前途はさだかではない。しかも、自らは病を得て、一人さびしく旅先で臥しているにもかかわらず、この詩には希望のおもいがこめられている。この希望は真理の力に自己を委ねた者に与えられる希望である。晩年の新島は、自らを「敗残の老卒」としたり、「敗れ太鼓」にたとえてあらわしたりした。だからここでいう希望とは、順風にある人の高望みではない。強い人の抱負でもないし、弱い人のやせがまんのがんばりでもない。日暮れて道なお遠く、旅人の足どりは重い。しかし、彼は「尚壯図を抱いて此春を迎う」とうたっている。

（大学神学部教授）



歳を送りて悲しむを休めよ 病羸の身、  
鷄鳴早已に佳辰を報ず。

劣才縦之済民の策に乏しくとも、  
尚壯図を抱いて此の春を迎う。

右病を養い大機に於て二十三年の春を迎えて

襄